フェートン号に乗船している
オランダ人の情報

ゼマン自身が戻って来なかった場合は、彼、船長はスヒンメルの首を切ると言って、なおも脅かしたことを除いては、彼らを丁寧にそしてよく取扱った。代表委員たちと船長に関して起こった応酬はすべてカラカス生れでメッツェラール[注94]と言う名を持つオランダ人によって通訳されたが、同人は水夫として〔この船で〕働いているが、エリザベート[注95]号に乗っていて捕えられたと言っていた、と。

私は両代表委員に、船上で起こったすべてのことについて文書により報告するよう命令した。

食料品が船上に運ばれて来る間ずっと船の側にいた大通詞の助左衛門は、私に次のように言った。すなわち、船長は、彼のところになお艀二艘分の薪と艀五艘分の水、それになお二俵分の馬鈴薯が送られてくるまでは代表委員たちをまだ解放する気はなかった。しかし助左衛門は、それらのものが明朝早い時間に運び込まれることを誓って約束したので、遂に捕えられていた代表委員たちは解放されることになった、と。

すべての大通詞たちは奉行の名において、私に、できるだけ短い期間のうちに簡単な報告を、しかも江戸において理解されるほどに明瞭な報告をするように、と言った。そして私はそのとおりに一通のきわめて短い手紙[注96]を作成したが、それは若干の訂正を受けた後、以下のとおり提出された。

尊敬する長崎奉行松平図書頭様

イギリス船はイギリスを出発し、そして高鉾島の島かげに投錨しました。その船の船長はホーゼマ

一八〇七年十一月―一八〇八年十一月

二一一

日本に来た目的
ペリューの証言

ンに、その船はイギリスを出発し、そしてその地からベンガルに行き、この最終の地から四九日で当地に到着したが、イギリスから当地まで合計八か月の航海であった、と話しました。

船長の言によれば船の乗組員の数は三五〇名であります。

同船来航の目的につき、イギリス船長は、オランダ船を拿捕するために来たのだ、と言いました。オランダのいつもの代表委員たちをイギリス船長は、翻訳と情報のために、策略を以て捕えました。そしてイギリスの船長は、次のように言いました。すなわち、日本人に損害を与えるために来たのではない、そしてきわめて長い間旅をしたので、食料品と水が欠乏した、そしてそれらのものを捕虜になった代表委員たちを通じて船長（敵である）の名において、署名者〔商館長〕に要求した、そしてそれが得られたら、両オランダ代表委員を直ちに解放するだろう、と。そして今や水と食料品が船に送られて来ました。その好意により欠乏は除かれました。そして船長はオランダ代表委員を解放し、そして水と食料品が送られて来たことに感謝しました。そのことによって上記の船長は、できるだけ速やかに出発し、再び戻って来ることはないだろうと言いました。云々。

奉行所では万事が少しく静かになったので、大通詞たちは一度彼らの家に帰る許しを得たが〔通詞〕日付は私のもとに留まるよう命ぜられた。(注97) その時は十二時頃であった。

われわれは今朝以来秘書官の居た場所に宿泊していたが、私は今はちょっと休息したいと思ってい

鎖国200年のツケは大きかった！　200年の間、戦乱続きのヨーロッパでは武器弾薬戦法(海戦含む)のイノベーションは凄まじく、オランダ頼みのいい加減な情報で済ませていたから、対抗できるはずもなく、戦後77年平和ボケの今の日本の状況に酷似している

十月六日

た。私の病状が極度にそれを必要とさせたからであるが、しかし私が置かれていた引き続く不安状態は、それを妨げ、そして私は、〔通詞〕目付伝之進〔茂〕とともにずっと起きていた。

六日　木曜日

朝の四時頃秘書官は〔通詞〕目付を呼び寄せて、彼に奉行の名において、今なお神崎に投錨している船を敵意をもって攻撃し、そしてもし可能であれば焼き払わなければならぬとする奉行の決意をどう思うか、私の考えを尋ねさせた。彼、伝之進はその場で私が私の考えをありのまま述べるようにと言った。私は彼、伝之進に、そのような重大な質問に対しては、私は先ずもって一度熟考したいと思う、と言い、そして私はまたそのとおりにしたが、私は次のとおりに考えた。すなわち、これまで当地長崎には、その数が総計でなお三〇〇人にも達しない僅かの兵士がいたのみで、あのような武装された船を征服するには決して充分耐えうる数ではない、ましてや日本の戦争のための装備は人々が悲しまねばならぬほどきわめてみじめなものであり、(私の見た限りでは)矢と弓、火縄付き燧石銃(注98)および砲車なしの加農砲以外には何も持っていない、その上に日本人は二〇〇年来、怠惰なそして惰弱な生活をして来た、それ故戦争に不慣れで、おそらくイギリス人が仕掛ける最初の砲撃で敗走するだろう、そしてイギリス人はそれから幸先がよいと見て、しかも敵意を以て攻撃されたなら、間違いなく彼らは彼らの船かまたは武装した艀を以て長崎に来て焼き打ちをかけるだろう。もしも一度そのようなことが起こったならば、日本国民は何と言うだろうか？　イギリス船は単にオランダ船をしかもた

だオランダ人たちだけを拿捕するために来た、そして今や長崎の住民たちは、オランダ人がイギリス人と行なった戦争のために、破滅させられた！　とでも言うだろう、たしかにイギリス国民は当地では、スペイン人やポルトガル人同様に当地に来航することを禁止されている、しかし一六七二年(注99)（この年、当地にあったイギリス船としては、最後のものが知られている）以来、その措置はおそらくすでにかなり効力を失なっていて、人々は、今いかにそれが考えられているかを知らない、今や私は軍隊の脆弱さと日本人の惨めな戦争装備を知っているので、私は奉行に対し次のような回答以外に別の答えを与えることができようか、すなわち、私は、まだ長崎には充分な数の兵士が到着していないので、私は例の船を黙って出港させるべきだと判断している、と言うのは、私がそうではなく別のことを忠告し、そして奉行が私の勧告に従った場合は、長崎の大勢の生命と衰微が私の良心をなやますことになることは必定であるからである、イギリス人〔船長〕は、彼の言うごとく、ただオランダ人を求めて当地に来たのであって日本人を求めて来たのではなく、しかもそれ故もし私が日本人たちをオランダ人のために戦わせようとするなら、それは難題をもちかけることとなりうるからである、と。

大通詞作三郎（同人もまたこの間にこの場に来ていた。）に私は、奉行に対し次のように言うよう命じた。すなわち、兵士と優れた武器が豊富にあったなら、そして彼らの勝利が確実にされるならば、例の船を攻撃することはきわめて良策であり、また望まれることであるに違いない、しかしながら、今なお長崎の兵士の数は決して充分ではなく、そしてそれ故もし少数の兵員をもって攻撃を企てるな

らば当然多数の兵士が無益に殺害されることになり、しかもイギリス人は当地で長崎ばかりか沿岸一帯を火と剣で破壊しつくすであろうから、それ故私の考えでは、もしイギリス船が敵対行動を行なわないなら、同船を黙って出発させることが最善の策であるに違いない、と。

作三郎は私の回答をそのまま奉行のもとへ持ち帰ったが、その後間もなくまた戻って来て、奉行は私の回答をきわめてよく理解し、そして根拠のあるのを知り、そしてそのことを書面にしてほしいと求めたと、言った。しかし私は、その書面では、まだ兵士の数が充分でないということは述べずに、ただ私の考えだけを述べるつもりになった。何故なら、おそらくこのことは、幕府では、奉行にとって良くないことと受取られるに違いないからである。そしてさらに奉行は次のような質問をした。すなわち、イギリス船が当地に来航した理由はほかにも何かありうるのではないか、それはたんにオランダ船を求めてだけのことかどうか、そうだということを私は保証できるかどうか、と。私は否、私はそれを保証することはできない、というのは、敵の言ったことや言葉を信用することはできないからである、と言った。同時に奉行は、そのこともまたその書面の中に含めるように命じた。

大通詞の助左衛門と多吉郎も今この場に来ていたので、私は、彼らの面前で次のような文章を書いた。

尊敬する長崎奉行松平図書頭様

一八〇七年十一月―一八〇八年十一月

大通詞たちにより私に、〔奉行〕閣下の名において、次のような仕方でお話がありました。すなわち、

すでにお知らせしたように、オランダはイギリスと戦争状態にあり、そして今や一隻のイギリス船が当地に到着しましたが、それはオランダ船を征服する目的のためであり、そのことは私には甚だ遺憾なことですが、それ故、閣下は同イギリス船を武力を以て抑留しようと考えておられ、そしてそれにつき私の意見を求められたので、

このような信頼の証に対して署名者は閣下に心から感謝いたします。そして上記イギリス船が当地に来航した理由はオランダ船を征服するためだと申し上げましたが、署名者はあえてそれと確定いたしません、と言うのは、敵の言葉や話したことは決して信用することはできないからです。

船長はその上、水とその他の食料品を恵与されるよう要求しました。そして、〔奉行〕閣下はそれらのものを彼に送り届けましたが、彼、船長は舷門のところに来てそれに対し謝意を表しました。そしてその時、彼、船長は捕えられていた二人のオランダ人を解放しました。そしてさらに彼は直ちに立去るつもりであり、再び来るつもりはない、と言いました。

同船を今や閣下のお尋ねに従って征服する方法を署名者は充分熟考しました。そして、同船を黙って出発させるのが最善の策と考えます。その理由は、もし同船を征服するならば、そのことは極めて望ましく、また良策ではあるに違いありませんが、しかしもし万一何かの事故によって、その

見込みが立たなくなってそれをなし遂げられなくなり、そしてそれ故におそらくほとんど損害を与えることができず、同船をそれ故当地から再び沖に出させてしまう場合、私の考えでは、そのようなことはおそらく多くの事柄にとって一段と障害になるに違いありません。それ故に、もし同船が彼〔船長〕の望みに従って出発するなら、署名者の意見では、船長は大いに感謝の念を抱くに違いありません、云々。

（欄外に）十月六日、朝

この文書はまたたく間に大通詞たちにより翻訳[注100]され、そして奉行に手渡された。通詞たちは、戻って来て、私に次のように報告した。すなわち、奉行はこの文書にきわめて満足であったが、しかし彼ら〔通詞たち〕は秘書官から、奉行はどちらかというと同船を攻撃する方を望んでいたが、しかしまた兵員の不足を見て、閣下にはどうしようもないことであるのを、胸も張り裂けるばかりに悔しがっていたと聞いた、と。

七時頃に一人の稽古通詞が、なお艀二艘分の薪、艀五艘分の水、二篭の馬鈴薯、一包の梨[注101]、煙草若干を持って船に行ったが、それらは大通詞助左衛門が昨夕誓って送り込まれることを約束しなければならなかったものである。

十時頃になおもう一度、検使たちの委員団が[注102]、イギリス船長に、彼が速やかに沖に出て、再び戻っ

ペリューのドゥーフへの手紙

て来ることのないようにと言うため、船に向かって出発した。しかしこの委員団が乗船する前に、例の船は錨を上げ、そして出帆するのを私は目撃した。このようなわけで委員団は無為に戻って来た。このことは私にとっては特に喜ばしいことであった。と言うのは、ちょうどその時、大村と諫早の兵士、(注103)総数約八〇〇人が到着したとの報告が入ったのであり、そしてこの軍勢で奉行は間違いなく何かを企てたことであろうが、しかし船の出帆によって今は何事も起こりえないし、そしてそれによって多くの人々の生命が救われたからであり、万一人々がこの船を征服したとしても、それはおそるべき流血なしには行なわれなかっただろうし、そのためオランダ人たちは、彼ら自身のためにきわめて多くの人々が命を失うにいたったとの罪を負わされたに違いないからである。そしてそれ故、私は全能の神にこの事件が幸運な結果に終ったことに感謝した。

十二時頃、今朝食料品を持って船に行った稽古通詞が戻って来て、私に船長からのきわめて不明瞭な英語で書かれた短い手紙を手渡したが、私はこの手紙から次のようにしか理解することができなかった。すなわち、彼船長は食料品を受取った、そして午後には沖に出るつもりである。彼は喜んで何がしかの品を私に贈りたいと思ったが、日本人の猜疑心のため彼はそうしなかった。さらに何かが述べられており、極めて不分明であるが、バタビアからの船舶について、最後のバタビア攻撃のさいは彼もその場にいた、とし、さらに彼はボネパルテ(注104)の憎むべき政治が、オランダ人とイギリス人のような、きわめて友好的に結び付けられていた二国民の疎隔の原因であるとはっきり述べている。さらに

また、もし私にヨーロッパまたはジャワへの手紙があれば、彼はそれを持って行き、中国において彼の地のわが商館の職員に渡すなり、あるいは一月にヨーロッパへ出発するイギリスの船舶に托すなりしたいと思う、と記し、さらに私は大いなる畏敬の念をもって、あなたの真正に忠実な従僕で今後ともあるでしょう、と結び、そしてイギリス海軍フェートン号船長、(ママ)グリットウッド・ベリューと署名し、宛名は〔フランス語で〕長崎商館長ドゥフ殿とし、このあて名のそばには〔やはりフランス語で〕大将ダーンデルス(注105)がバタビアに着いた、彼はその時オランダ所有地とその各部分の総督の職務についていると記す。私は奉行に対し、私が理解できた限りにおいて、その短い手紙の内容を知らせた。

例の船は今は出帆してしまったので、私は当地に配属されている他のオランダ人たちとともに出島に戻る許可を得た。われわれが戻ったのは、奉行と秘書官ならびに検使たちが二人の捕虜となった代表委員の解放のためにとった労に対して私自身が奉行所でもう一度感謝した後、午後の二時のことであった。そして上席町年寄高島四郎兵衛(注106)様が、なおも出島の見張りに当っていたので、私は、町年寄閣下に対しても、同閣下のとった労に対し感謝したが、当地出島では、失なわれたものは皆無であった。

今夕、水門の内側に据えられていた二門の小型加農砲が取り去られ、そして町年寄高島四郎兵衛様も自分の側近く従えていた武装した下検使たちとともに出島から退去した。

十月七日

七日　金曜日

二人の捕えられていた代表委員が私に、彼らが捕えられていた間の出来事に関する報告書を提出した。そしてスヒンメルは他にもいろいろと話をし、とりわけ次のことを話した。すなわち、大将ダーンデルスがバタビアに到着したこと、そしてわれらが国王[注107]は大きな勝利を得、そして強力に前進したこと、上記船長はイェナ[注108]と言う場所の名前をあげ、そこには国王陛下がいると言ったが、船長が不完全なフランス語を話したため、スヒンメルは彼の言うところを正確に理解することができなかったこと、しかも船長は彼に対し何かを書き記すことも許可しなかったこと、またスヒンメルとホーゼマンは私に対しさらに、船上では数人の人々が当地の湾とこの辺一帯の図面を描いていたこと、である。

午後に私は、ごく内々のこととして、昨夜奉行が割腹[注109]したと知らされた。その理由はまだ不明であるが、しかし人々は次のように推測している。すなわち、それはイギリス人は、ポルトガル人やスペイン人と同様に、昔から当地において入国を禁止されており、これらの国民のうちのいずれかが当地に来た場合は、彼らの船と乗組員を焼き払う[注110]のが命令である、そして奉行はそうするためには充分な軍勢を持たなかったため、その機会を見出すことができず、それ故、わずか一握りの軍勢をもって望みのない企てを行なって、数え切れないほど多くの人々を不幸にするよりは、むしろ自らの生命だけを奪いたかったのだ、と。

十月八日　10/8

八日　土曜日

別々の時に〔通詞〕目付が、また大通詞の助左衛門と作三郎が、私のところに来て奉行の事件につ

き話したが、それはごく内々のことであり、長崎の住民に対しては奉行は重病であることとなっており、同人の死亡が公けに知らされるまでには多分なお数日はかかる筈だと言った。

また本日なお内密のこととして次のように告げられた。すなわち、一昨日夕刻十時に大村の領主が奉行所に来て、奉行ときわめて長時間秘密会談を行なった、そして間もなく上記領主は退出したが、奉行はただ一人彼の部屋に行き、そしてその時そこで切腹した、奉行閣下はなお、まず第一に彼の江戸にいる家族、着任する奉行、[注10]そして自分自身の秘書官〔家老〕に各々一通の手紙を認めた、と。

多くの人々によって、奉行は番所を適切に装備するのを怠った上、九月には番所〔の兵〕を引揚げるよう命じたかどで有罪と考えられた。しかしまた他の人からは彼は無罪であり、それは肥前の領主[注11]の責任に帰せられると言われている。しかし私個人としては閣下は無罪であると信じている。というのは、目付たちに囲まれており、そしてそのうちには、たしかにしばらく前に、支出の節約のため、警固の人数を減らすよう、そしてそれにより幕府においてお褒めに与かるよう彼に勧告したものがいたが、しかも奉行は、誰かが将軍のお金を無駄使いしているとして、彼ら目付たちによって幕府に通告されないように、それ故その勧告をあえて拒否しようとはしなかったところ、今や入国を禁止されている船が一隻当地に到着するという事件が起こり、〔奉行〕閣下は、将軍の命令を適切に実行することのできない状態となっているからである。そして奉行が目付たちを恐れてあえてどうすることもできない状態が長く続く限り、私の考えでは、このような危機の場合、当地の奉行も、他のどこの奉

一八〇七年十一月―一八〇八年十一月

警護手薄についての風聞とドゥーフの意見

行も、この国においては、うまくやって行くことはできないであろう。

私はまた今日、例の船の来航のさいの、ならびにわれわれが出島を離れていた間に生じた経費についての計算書を受取ったが、それは本方勘定[113]の八三・七七テールの額であったので、私はそれを帳簿の上で精算するよう命令した。

十月九日

九日　日曜日より十二日　水曜日まで

筑前の領主が、彼の一行とともに、長崎に来たことのほかには何の出来事もなかった。

十月十三日

十三日　木曜日

私は大通詞たちの訪問を受けたが、彼らはもっと多くのさまざまな話のなかで、とりわけ、次のようなことを私に言った。すなわち、オランダ語の話せる一人のイギリス船の水夫[114]が、最後の水と食料品が船に運ばれたさい、フランス皇帝陛下の弟[115]がオランダ国王になっていると語ったが、また同じ水夫は、彼が四、五年前、スミット船長[116]とともに当地に来航したことがあるとも言った、と。彼ら通詞は私に、それは本当かどうかと尋ねた。私はまず、どう答えたらいいのか分らなかった。というのは、つい昨年、このことを私は〔日本側に〕知らせずに置いたが、しかし、一昨年スヒンメルペニンク閣下[117]の任命を秘匿したところ、去年（会社の上役たちがルイ・ナポレオン陛下のオランダの王位就任のことを知らせて来たちょうどその時）その事実が証明されたのと同じことになるからである。しかし、しばらく考えた後、私には去年そういう噂はあったが、その時には、まだ正式に知らされていなかった、

経費！

ドゥーフの嘘

rapporteurs 二人に代表される通詞団で、出島西隅にある通詞部屋に日々出勤し、商館長および長崎奉行のもとに出頭し、一人の通詞目付 dwarskijker の監督下にあった。通詞仲間は「年番訳司」の印文のある円形の墨印を備えていた。

注23　本日付の秘密決議録の本日の条。注10・13・18の綴（NFJ五八二・四一八）に原文がある。

注24　高鉾島。原語は Papenberg（僧の山）でポルトガル人神父たちの処刑の地を意味する。オランダ船は出帆期限の陰暦九月二十日までに湾内の碇泊地を出てここで風を待つ定めであった。

注25　双錨泊することなく。原語は onvertuyd で、その語幹の原形 vertuyen は船首の錨二本を用いて碇泊すること。

注26　代表委員たち。原語は de gecommitteerden で、ここではオランダ商館員である。

注27　ボヘット。Pogedt の名はヤン・ピーテル Jan Pieter（生没年未詳）、商館長ヘンミーのころから商務員補 adsistent として出島にいて、のち商館長ドゥフの時簿記役 boekhouder となり、在勤中、遊女との間に子虎吉ができた。

注28　ヘーネマンス。Geenemans の名はレナルト Lenard（生没年未詳）、商務員補としてワルデナールと共に着任して簿記役となった。

注29　誓約した筆者頭。原語は de gesworre scriba である。名を記さないが、ワルデナールと共に着任した筆者頭ヘンドリック・ドゥフ・ユニアを指す。本書第四章注1参照。

注30　船長ディトマル・スミット。Captain Ditmar Smith（生没年未詳）は Captain ter zee（海軍大佐）で、一七九四年エルフプリンス号 Erfprins、一七九五年ウェストカッペレ号 Westcappele の船長として来日、一八〇〇年には傭船マサチューセッツ号の上乗として長崎に来た。一八〇七年デンマーク傭船の船長としてもう一度長崎に来る。

注31　船長ハッチングズ。Capitain Hutchings は生没年未詳、たぶんボストンの人であろう。注19参照。この船長の書記ウィリアム・クリーヴランドが長崎来航日記を残している。Madoka Kanai, A Diary of William Cleveland, captain's clerk on board the Massachusetts. Quezon City, 1965 および金井圓「クリーヴランド

しかしそれはオランダ語のできるイギリス人の水夫が語ったことなので、真実であるかもしれない、と答えるのが正当であると思われた。そこで、私には、今や彼らに対して、イギリスの船長が商務員補スヒンメルに語ったこと、すなわち、フランス皇帝の弟がオランダ国王となり、大きな勝利を得て、遠く進撃したこと、さらにまたダーンデルス閣下がヨーロッパからバタビアに着き、現在東インドにおけるオランダの所有地の総督として支配していることを話すのが適切であると思われた。しかし私は、これは結局はわれわれの敵であるイギリス人の話であるので、真実ではありうるが、私にはそれを確言できない、と彼ら通詞に言った。通詞たちは私に、十日か十二日後に当地にその到着が期待される新任奉行が来たなら、以上のことを報告する、と約束した。

彼らはさらに私に、明後日奉行の死去が知らされると言った。

十月十五日

十五日　土曜日

年番大通詞が来て私に、長崎奉行松平図書頭様が死去し、明日埋葬されるはずだが（閣下が切腹したのは、今月七日のことで、それ以来すでに八日になる）再び許しが出るまでは、音楽を奏し、公然と騒がしい催し物を行なってはならない、との命令が出たと知らせた。私は年番通詞に、私の名において秘書官たちにその主人の死に対する私の哀悼の意を伝えてくれるよう命じたが、年番通詞はそのとおりにすると私に言った。

十月十六日

十六日　日曜日

奉行切腹の原因はオランダ人のせいと街の噂
ロシア人のせいと奸計をめぐらすドゥーフ

奉行の遺骸は、通常そのような場合に行なわれる儀式をもって埋葬[注118]された。閣下の死は甚だ悔まれているとの噂が立っている。

十月十八日　火曜日

私はごく内々の話として次のことを知らされた。すなわち、奉行の死の原因について、奉行所の下級の役人たちや長崎の住民の間で、いろいろな噂が流れており、それは大部分われわれに好意的でないものであるが、その理由は、イギリス人は、ただオランダ船を探すためにだけ当地に来たのだと言っているのだから、奉行の切腹の原因はオランダ人であると推測されていることにある、と。このような噂は、将来においてわれわれにとって不利になりかねないと私には思われたので、私は、イギリスの船長の、日本人を悔辱するためではなく、ただオランダ船を略奪するために当地に来航したのだという主張を否定するために何かよい方法はないかと思いめぐらした。この件を充分考慮したのち、イギリス船来航の原因は（最近の情報によると）イギリスと同盟を結んでおり、今や日本の戦争相手でもあるロシア人のせいであるとし、こうすることによって例の噂が少しでも減るかどうかを見てみるのがよいと思った。私はそこで小通詞たちを呼ばせたが、彼らは、

十月十九日　水曜日

の午前中にやって来た。そして彼らに私はこう告げた。すなわち、先日当地に入港したイギリス船の来航の理由について私は、イギリス船長が報告したものとはまったく見解を異にする、何故ならば私

ドゥーフの計略

には、彼、イギリス船長がいかなる戦略的目的であえて一隻の船で当地に入港を企てたかは、理解できないが、それは日本人がどれほど強く武装されているか、また、その船が当地で拿捕されるという彼、船長にとって弁明し難いほどの危険に晒されていることが彼にはわかっていなかったからである、それにまた彼は（イギリスと同盟を結んでいる）ロシア人の依頼と要望に基づき、日本人が当地ではいかなる軍備を持っているかを当地へ偵察しに来たもので、そして今では彼、イギリス人は、日本人の軍備は不充分であることがよくわかっているので、将来いつか当地の攻撃を試みる可能性が充分にある。なぜなら、ロシア人は昨年フランス語で書いた書面[注119]で、日本国の頑固な態度がこれ以上つづくなら、それは国土の喪失になりかねないと言ったが、それは蝦夷[注120]地すなわち松前だけでなく、日本の全土を指すものだからである、彼らは現在ではこの地域で日本に損害を与えることができないので、その目的を達成するために、イギリス人と共謀したことは容易に想像できるであろう、何故なら、イギリス人は、彼らの商船をカントン[注121]まで護送するために年々幾隻かの軍艦を派遣しているが、カントンへの海路は当地からはあまり離れていないし、彼らの軍艦は取引期間中は何もすることがなくカントンに碇泊しているからである、と。

通詞たちは、この私の説明をよく了解すると、それらを少し考慮した上で、近い内にまた報告するつもりだと言った。

現在四隻いる中国ジャンク船が出帆の準備を整えて待っているところであり、また私はこの異常な

一八〇七年十一月―一八〇八年十一月

事件についてなるべく速やかに上役たちに報告することを私の義務と考えたので、私は、奉行の到着しだい、閣下に、四隻の出発準備の出来たジャンク船に託して、カントン経由でバタビアへ手紙を送る許可を求め、同時に、奉行が中国人船長たちに、その手紙が正しくカントンのオランダ人の会社職員に手渡されるよう命令して頂きたい、と彼ら通詞たちに命じた。彼ら通詞たちは、そうすると約束したが、その手紙をすべて奉行所で読まなければならないので、できるだけ簡単で、明瞭に書くように要請した。

私がその手紙を認めている間に、

十月二十一日

二十一日　金曜日

に通詞たちは、全員で新任奉行を迎えるため、矢上へ行った。

十月二十二日

二十二日　土曜日

奉行曲渕甲斐守様が長崎に到着したので、私は慣例に従い、閣下の到着に対し祝辞を述べさせた。

十月二十三日

二十三日　日曜日

大通詞たちは、揃って私のもとに来て、私に次のように言った。すなわち、彼らは、私が今月十九日に話した私の説明を内々で秘書官に知らせたが、彼は彼らに、近い将来私が最近当地に来航したイギリス船について奉行所で尋問される予定となっているので、その時まではこの話を表に出すのを待ってほしいと言い、他方、秘書官は彼らに私の説明は充分真実であるように思えると言った、と。